

# 式亭三馬『小野篁謔字尽』 —パロディとことば遊び—

岩 下 真 央



図1 『小野篁謔字尽』より「内題・総目」1806年刊  
(東京学芸大学附属図書館蔵)



図2 『小野篁謔字尽』より「大篆小篆似字尽」  
(東京学芸大学附属図書館蔵)

江戸時代後期の戯作者・式亭三馬による滑稽本の一つに『小野篁謔字尽』(文化3年(1806)刊)がある。本の表題及び主題は、江戸時代に広く使われた往来物『小野篁歌字尽』(おののたかむらうたじづくし)のもじりであり、全36項目のうち24項目が節用集のパロディである(鈴木, 1974、太平, 1993)。辞書の体裁を維持しながら、江戸庶民の日常生活に関する事物をユーモラスに表現している点が特徴的である。曲亭馬琴、恋川春町の黄表紙を基にして書かれた箇所や、葛飾北斎の錦絵から着想を得たと考えられる項目等もあり、江戸のパロディ文化を示す作品である。

『謔字尽』には、様々なことばと文字を用いた遊びが収録されている。その中から、黄表紙をモチーフにして書かれた項目を以下に紹介する。

8丁裏から9丁表の項目「大篆小篆似字尽」(図2)には、篆書体の漢字を物に見立てて読解させる文字遊び「似字」がある。この項目は、曲亭馬琴の黄表紙『無筆節用似字尽』(寛政9年(1797)刊)(図3)から着想を得て作られたと考えられる。馬琴の『似字尽』には、漢字や平仮名、片仮名を物に見立てた似字が合計70字書かれている。一方の『謔字尽』では、篆書体の漢字に限定して似字とし、『似字尽』から6字の字形や訓を採用し収録している。

14丁表から21丁表の項目「小野篁謔字尽」は、江戸時代に寺子屋で使われていた漢字学習のための往来物(教科書)『小野篁歌字尽』を原本としたパロディである。「謔字」は漢字を組み



図3 『無筆節用似字尽3巻』1797年刊  
(国立国会図書館蔵)



図4 『廓篁費字尽』1783年刊(国立国会図書館蔵)



図5 『小野篁謔字尽』より「小野篁謔字尽」  
(東京学芸大学附属図書館蔵)

合わせて新たな漢字を創作したり、単字や熟字に連想的な訓を付けたりする遊びであり、「謔字尽」中に全57項189字が収録されている。表題の「箆」という字も謔字の一つであり、「篁」の字の「皇」を「愚」に変えて「ばかむら」と歪曲して読ませる。この「箆」の字の初出は『謔字尽』ではなく、恋川春町の黄表紙『廓 箆 費字尽』(天明3年(1783)刊)だと考えられる。『費字尽』には謔字と同様の漢字遊び「費字」全17項65字が掲出されており、そのうち27字の字形や訓が『謔字尽』に引用されている。

『費字尽』7丁裏の第7項(図4)には、「男」と「女」という2字の漢字を組み合わせた創作漢字が掲載されており、「へだたるがみたてふられるうしろむき。よこがきまりにおくるきぬぎぬ」という歌が添えられている。『謔字尽』16丁表の第15項(図5)は『費字尽』を一部改変して引用し、「むかひあふみたてふられたうしろむきよこがきまりでおくるきぬぎぬ」としている。『謔字尽』では、『費字尽』の3字目「きまり」に該当する創作漢字を掲載せず空白としているが、歌については「よこがきまり」という第4句をそのまま残した形で引用している。

このような改変が行われた背景に、寛政の改革があると考えられる。寛政2年(1790)の出版統制令では風俗を乱すものとして好色本の類の出版が禁じられ、『費字尽』の作者である春町も弾圧を受けた。厳しい統制の中で法令に違反せずに「売れるもの」にするためには、幅広い読者の需要に応じる必要があった。三馬は『坂東太郎強盗譚』(文政8年(1825)刊)の初編序の中で、『謔字尽』と同時期に出版した自著の黄表紙『雷太郎強悪物語』(文化3年(1806)刊)について、「お子さまがた」が好む作品を予想して投げ、大当たりしたと述べている(本田, 1975)。『謔字尽』についても、規制に抵触しない程度に『費字尽』の色を残しつつ、年少者を含めた幅広い読者層に支持されることを想定して執筆したのではないだろうか。

黄表紙の他に、版画作品から取り込んだと思われる文字遊びもある。23丁表から24丁裏の頭書「おいらんだ文字」(図6)は「オランダ文字」のもじりであり、吉原の遊女が使った「ゴセウザンス」、「オガミンズ」といった廓詞を、横倒しにした一筆書きの平仮名で記して西洋風の筆

記体に見立てる遊びである。この「おいらんだ文字」と同様の文字が、葛飾北斎の錦絵「おしをくりはとうつうせんづ」(図7)の画題と款記に見られる。文化元年(1804)から文化2年(1805)頃に制作された作品であり、同時期の北斎の作品に銅版画風の木版画集「江戸八景阿蘭陀画鏡」があることから、当時の北斎は西洋画の技法を学んでいたと考えられる。遊び心のある画題と款記は、西洋画を真似て書いたものであろう。

『謔字尽』がパロディの対象やモチーフにしたものは、上記に挙げた以外にも、物語や随筆、説話、芸能等の多岐に渡る。様々な事物を滑稽化して親しみやすい遊びに仕立て、大衆向けのパロディとして完成された『謔字尽』は、「道外節用」という内題の通り、まさに江戸の人々にとっての「ことば・文字遊びの辞書」だと言える。近世の言語と文化を考える上で、重要な資料の一つである。

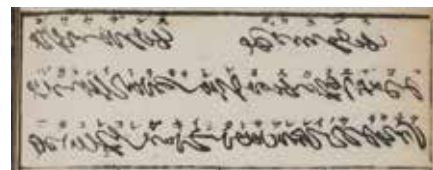


図6 『小野箆謔字尽』より「おいらんだ文字」(東京学芸大学附属図書館蔵)をもとに作成



図7 「おしをくりはとうつうせんづ」1804-1805年頃作 (Colbase<[https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tnm/A-10569-638?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-10569-638?locale=ja)>)

【参考資料】

- 鈴木真喜男「小野箆謔字尽」『日本庶民文化史料集成』9巻, 藝能史研究会編, 三一書房, 1974, pp. 411-436.
- 太平主人『小野箆謔字尽』太平文庫, 1993.
- 棚橋正博『式亭三馬 江戸の戯作者』ペリカン社, 1994.
- 本田康雄「式亭三馬の合巻と読本」『国文学研究資料館紀要』1号, 1975, pp. 183-201.
- 吉丸雄哉『式亭三馬とその周辺』新典社, 2011.

関西大学博物館学芸アシスタント  
 関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学